慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	未来時に生起する事象の捉え方：非有界は可能か： 認知時を第3項とする英語の分析より
Sub Title	An analysis of aspectuality in future reference applying a conceptual framework with "cognition time" : evidence from English
Author	佐野, けい子(Sano, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.241- 271
JaLC DOI	10.14991/005.00000054-0241
Abstract	先行研究では佐野（2017）は、Reichenbach流の3つの時間項による時制の分析において、第3項を事象を認知する認知時とすると、文法アスペクトは話者が事象を捉える認知時と事象時との、同時/継時関係として表すことができると提唱した。さらに、それを認知時と発話時との2項関係と関係づけることで、アスペクト統合して時制の意味が得られることになる。この仮説に基づき、本稿では英語において、未来時に言及する場合に、事象をその生起中に捉えることができるかという問題について検討した。
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0241

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

未来時に生起する事象の捉え方：非有界は可能か

認知時を第3項とする英語の分析より

佐　野　けい子

要旨

先行研究では佐野（2017）は、Reichenbach流の3つの時間項による時制の分析において、第3項を事象を認知する認知時とすると、文法アスペクトは話者が事象を捉える認知時と事象時との、同時/継時関係として表すことができると提唱した。さらに、それを認知時と発話時との2項関係と関係づけることで、アスペクト統合して時制の意味が得られることになる。この仮説に基づき、本稿では英語において、未来時に言及する場合に、事象をその生起中に捉えることができるかという問題について検討した。

1．序

定形節の時制により表される意味を発話時（S）と事象の生起時（E）だけでなく、第3の時間項となるレファレンス時（R）を導入し、その3つの時間項の（同時/継時）関係で表したのはReichenbach（1947）である。記号論理学の教科書の中で、自然言語の分析への応用を試みた章の一節として提示された。言語学としての時制の研究では、特定の言語の形式から意味への対応が一般的であったのに対し、この研究では、いくつかの言語に通暁して認められる意味から言語形式への対応を考察している。この「意味から形式への対応」は、その後、Klein（1994）により継承され、第3の時間項は、文脈により与えられることもある話題時（TT）とされた。この話題時（TT）と発話時

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 54 号（2023）pp.241-271

（S）との関係が時制を、また話題時（TT）と事象時（E）が時間軸上で占める区間の相互の包摂関係が文法的アスペクト（以下アスペクト）を表すされた。

これに対し、佐野（2017）は、レファレンス時、話題時、とは異なる概念と機能を担う第3の時間項、認知時（C）、を導入した。この認知時は、話者が表現しようとする事象を認知的に捉える時（点）を表している。また、3つの時間項はそれぞれ変数とし、文脈も含めて言語的に、あるいは状況的にその値が決まるものとした。

この枠組みでの認知時と事象時（E）との関係は、包摂関係ではなく、同時/継時関係（C＝E、C＞E、C＜E：CはEと同時、より以降、より以前）によるもので、それぞれアスペクトに対応するものとした。また時制については、このアスペクトを表す認知時と事象時という2項関係に、認知時を介して発話時を推移的に関係づけることによって、3項の時間関係として初めて得られるとした。

ここではアスペクトは非有界と有界に大別される。非有界（C＝E）は事象生起中に、すなわち事象生起の境界内で認知され、事象の開始点、終了点を含まない。これに対し有界は2つの場合がある。事象の生起終了点以降に認知される場合（C＞E）と、事象の開始点以前（C＜E）に認知される場合で、いずれも事象生起期間の境界外からの認知となる。

認知時を導入したことで、3項の時間項関係が表す意味も、先行の2つの研究とは異なるものとなった。それぞれの3項の時間項関係に日、英、仏語においてどのような表現（形式）が対応するかを、直接法における基本的な用法に限定して検討が行われた。その結果、事象が発話時（以下本稿ではUと表記）（U＝C＝E）もしくは発話時以前（E＜C＝U、E＝C＜U）に生起している場合には、3か国語共、表現形式そのもの、あるいは各表現形式と時間表現の組み合わせが、概ね時間項の組み合わせに沿って相互に弁別的に分布していることが見られた。ここで重要な点は非有界については先行文脈または前置された時間表現が必須となることである（表1（後述）参照）。

発話時以降の未来時（以下単に未来時）に生起する事象に関しても、時間項の関係としては過去時と同様に、有界と非有界の2通りの時間関係（U＝

表１　直接法における、日英仏語の時制の意味基盤となる３項の時間項関係：
[発話時(U)＊認知時(C)]と[認知時(C)＊事象時(E)(アスペクト)]の組み合せ

	アスペクト		
	非有界	有界	
	C＝E 事象生起中に認知時 Comrie(1976)他の名称：Imperfective	E＜C 事象終了以降に認知時 Perfective	C＜E 事象開始以前に認知時
U=C	U＝C＝E 認知時： 対象事象： 発話時現在に下記の事象を生起中として認知 単一事象:状態、動作の進行 複数事象:反復、連鎖、習慣	E＜C＝U 発話時においてそれ以前(過去時)に、ある事象の終了終止を認知 継続可能な事象の場合も含む	U＝C＜E 発話時以降(未来時)に生起開始が想定される事象について発話時に認知 (継続可能な事象の場合も含むことを本稿において検証)
U>C 要先行文脈/前置時間表現によるCの指定	E＝C＜U 発話時以前のある時(過去時)に、以下の事象を生起中として認知 単一事象:状態、動作の進行 複数事象:反復、連鎖、習慣	E＜C＜U 発話時以前のある時(過去時)に、ある事象の終了/終止を認知(時制の一致の場合) ある事象が生起完了した状態を認知（過去時における完了）	
U<C	U＜C＝E 発話時以降のある時(未来時)に、下記の事象をその生起中に認知 単一事象:状態、動作の進行 複数事象:反復、連鎖、習慣 (本稿での分析結果では「未来時における認知」という解釈は不可)		

＊ U<C, C>E（未来完了）は未来時における完了のみのため、また C<E, C<U（過去における未来)は時制の一致がある場合にのみ認められることから、この表には挙げていない。

C＜E, U＜C＝E）が対応することになる。未来時に生起する事象について発話時時点においてその事象の生起を想定して、有界に捉える（認知する）場合（U＝C＜E）は、明確に該当する表現が得られた。

しかし、提唱された認知時による枠組みに従うと、非有界な捉え方の場合には、まだ現実化していない未来のある時に生起する事象（U＜C）を、その生起途中の未来時に身を置いて認知する（e.g.見る、記憶する）（C＝E）ことになる。これは時間項の組み合わせとしては可能であっても、現実世界においては不可能な状況を表すことになる。したがって、これは認知時による分析の妥当性を問う問題となりえることから、この未来時における非有界な捉え方については慎重な検討を要するため、将来の課題とされた。

認知時に基づく枠組みでは未来時においては、事象は非有界に捉えられな

いことになるのに対し、過去時に生起中の事象をその時点で認知したという場合には認知上の問題はないので、非有界に捉えることができる。ここで、検討すべき重要な問題が生じることになる。それは現在時制、過去時制の単文において非有界として解釈されている、状態動詞、動作動詞の進行形、習慣を表す表現を含む述語が、未来時における事象の生起を表す単文にも使用されているという問題である。

一見したところ当該の仮説への反証のよう見えるこの問題について、佐野（2019）では、日本語の状態動詞および「テーイル形」について、特定の時間表現との共起を満たす条件下では、事象生起が過去時においては非有界（E＝C＜U）だけでなく既に終了したという有界（E＜C＝U）という解釈も得られることを示した。（この点は佐野（2017）では示唆はしていたものの、詳細な検討は行われていなかった。）そのうえで、発話時以降の未来時に生起する事象については、基本的にすべての事象が発話時以降に生起すると認知される有界（U＝C＜E）と解釈されることを示した。ただし、ある要因により、発話時に既に生起している場合にのみ、あたかも未来時において継続中に認知され、非有界であるかのように解釈されるという仮説を提示した（この仮説について詳細は以下第4節における説明を参照）。

本稿においては、英語で非有界を表すとされる形式を持つ例文をもとに、どのような解釈が得られるか、それらが共起する時間表現等により、どのように解釈が変化するかを、下記各節に従い検討を行う。その結果に基づき認知時を第3項とする枠組みにおいて、未来時における非有界な解釈の可能性を検討し、現仮説の妥当性を検証する。

以下第2節ではアスペクトの担う意味について、本稿での捉え方と従来からの捉え方の比較検討を行い、その相違点を明らかにする。

第3節では英語で過去時に非有界として捉えられた表現が、共起する時間表現を変化させることで、新たに有界な事象として解釈される可能性を探る。検討対象とした表現は、状態動詞および動態動詞のうち、動作動詞の進行形、および動態動詞によるものも含め、反復・習慣を表す形式が述語として用いられた単文で、事象生起の終止点を示す表現を付加した場合に有界事

象としての解釈が得られるか否かを検討する。

第4節では、過去時と未来時では、「有界」というときの境界が異なり、未来時では事象の開始時となることを先ず確認する。そのうえで、過去時においては非有界と判断された例文を、共起する時間表現、時制を表す形態素など必要な個所は未来時に適するように変更して提示したとき、同じように非有界と判断されるか否かを検討する。その結果に基づき、ここでの認知時に基づく仮説の妥当性を検証する。

2．Comrie（1976）、Smith（1991）、Klein（1994）による アスペクトと本稿での枠組み

認知時を導入することで、本稿の枠組みにおけるアスペクトは、Comrie（1976）に代表されるperfective（Perf.）とimperfective（Imp.）との対立とは異なる意味を担うこととなった。この節ではその主たる相違点を指摘しながら、ここでのアスペクトの捉え方を概観する。

Comrie（1976）は、スラブ語（語幹の形式の違い）やロマンス語（過去時制の屈折）においては、文法形式上のカテゴリーとして認められるPerf.とImp.というアスペクトの対立は、たとえ文法上カテゴリー化されていない言語でも（例えば英語）、その下位カテゴリーにおいて対立が認められるとしている。そしてそれらに共通する特徴として、Perf. では事象をその始まり、中間、終わりのすべての段階を持つ1つの全体として見て（view）いるのに対し、Imp. では、事象内部の時間的構成に言及する、事象内部での見方であるとしている。

その後、Langacker（1991）もSmith（1991）もアスペクト対立は、この事象の捉え方の相違であるという説を基本的に継承している。しかし、この事象の見方に基づく捉え方では、いずれも、アスペクトを異なる時間項同士の関係としては捉えていない。この点はReichenbach（1947）においても同様で、事象生起時間を1つの時点に還元できる場合（Perf.）と継続する事象として区間を特定する場合（Imp.）の相違とされており、時間項の相互関係に

は反映されなかった。

これに対し、Klein（1994）は、アスペクトは事象生起の見方の反映であるという比喩的捉え方を排し、Reichenbachの説を発展させた。第3項を話題時とし、発話によって断定される内容が位置づけられる「時間範囲」という新たな機能を与えた。この枠組みによるアスペクトは、話題時と事象時の包摂関係により表わされるとした。つまり、時間軸上で話題時の範囲内に事象の生起時間全体が含まれる(Perf.)のか、それとも反対に事象の生起に要する時間の範囲内に話題時が含まれるのかという対立とした。Klein では、発話時と話題時（S＊TT）との関係が時制を表し、話題時と事象時（TT＊E）の関係がアスペクトを表すとしているために、Perf.もImp.も、どの時制とも自由に関係づけられることになる。この点は、Smithの提唱したアスペクト対立においても、共起する時制の選択に制限はない。Smith は、Perf.とImp.の他にどちらにも解釈できるneutralというアスペクトも想定しており、英語では、現在時制の一部と、未来時制がこれにあたるとしている。これらは、次節でみる本稿での枠組みと大きく異なる点である。

アスペクトの意味：事象の有界性と非有界性vs事象の全体性と内部構成

ここでの枠組みでは、認知時と事象時の時間的関係（C＊E）が、アスペクトの表す意味の対立の基盤となる。その1つは、話者が事象を開始点も終止点も含まない生起途中に「非有界」として（過去時に於いてはImp.に対応）捉える場合である。これに対立するのは、事象を生起開始点、もしくは終止点という境界の外から「有界」として認知する場合である（過去時においてはPerf.に対応）。

認知時と事象時の関係は、非有界な事象として捉える場合には、同時（C＝E）となる。有界な事象としての捉え方は2通りある。終点の境界を認知する場合には（C＞E）となる。この終止点をもつ事象の場合には、前提として開始点があるとされる。事象の開始点を境界として認知する場合は（C＜E）となり、この場合には、事象の開始点は捉えられる（認知される）ものの、その終止点については、日、英、仏語については特に定めはないもの

とする。

表1に、このようにして得られたアスペクトを表す2項から成る3種の時間関係を上段各行に示し、発話時と認知時との時間関係（U＊C）の一覧を左端列に示した（ここで以下において非有界として捉えられる行為は基本的にVendler（1957）の語彙アスペクト分類でのactivityのみを対象とした）。[1]各セルには、相互の組み合わせにより得られる、認知時を介した発話時と事象時の関係（アスペクト）を内包した時制の意味を表す3項の時間項関係が示されている。

ここで、（C＝E）は事象生起中にその事象を認知（見る、記憶に留めるなど）する場合で、その時が発話時と同時である場合には（U＝C）、組み合わせは（U＝C＝E）となる。基本的に発話時現在において継続中の事象を発話の時点で捉えることになる。この時、事象が単一事象であれば、状態もしくは動作の進行継続となる。また複数の同一事象の連鎖であれば、反復・習慣となる。事象生起中にその事象を認知する（C＝ E）のが、発話時以前（U＜C）の過去時に行われた場合（U＞C＝E）には、話者が過去のある時に認知した事象をその後の発話時に想起して、言語により表現することを表す。[2]

ここで重要なのは、事象を非有界として捉えそれを言語により表現するには認知時が発話時と同時の場合は発話時に、そうでない場合は文脈もしくは、特定の時間表現の前置によって指定されなければならない、という点である。これは先に検討したどの言語においても共通する条件といえる。

3. 過去時に生起した事象の非有界性と有界性を決定する要因

生起中の事象をその時点において認知する非有界（C＝E）の捉え方は未来時において果たして可能かという検証を行うために、本節では、先ず過去時において事象生起中に認知する非有界（Imp.）を表すとされる表現（例えば主動詞が動作動詞の進行形による場合など）が、非有界だけでなく、事象の終了時以降に認知する有界の捉え方（C＞E）をも許容するかを検討する。検討を始めるにあたって、先ず、非有界として捉えていると判断する基準に

ついてみておこう。

時間表現、頻度表現との共起について

ここでの枠組では、非有界に捉える場合には、先行文脈に、あるいは前置された時間表現によって、過去のどの時（点）で事象を捉えたのかが示される必要がある。これは単一事象の場合だけでなく、複数の単一事象の連鎖が、反復や習慣を表す場合も同様である（ただし後者の場合は「ある期間」）。

単一事象としては有界な捉え方をされて単純過去形により表されていたものが、一定期間複数回に及ぶ事象の連鎖により、新たに継続性のある1つの事象として、非有界に捉えられることは可能である。

例えば進行形や習慣を表す頻度の表現を伴う文は、先行する文脈や時間表現があると、通常は非有界な捉え方をされる。同じ文法形式の文について、時間表現を、事象継続の終了時間や継続時間の期限を表す表現（～4時まで、2時間（の間）等）に変更した場合、終止点が設定されることで、有界な捉え方がされる可能性を検討する。この点は、特に未来時における非有界な捉え方を検討するうえで要となる。[3]

例文は単一の事象か、複数の事象の反復による連鎖かを分けて提示する。各例文に続けて、その文が事象を有界・非有界のどちらで捉えていると解釈されるかをテストした。そのテストの方法は以下のとおりである。

有界・非有界テスト方法

発話時以前のある時に、事象の生起が継続中であると認知された事象の場合（U＞C　C＝E）はその特定の時点に限定してスポットライトをあてているような状況なので、その後発話時に至るまでそのまま事象が継続しても、またそれ以前に終了していても許容される。これに対し、発話時以前に事象が終了したと発話時に認知された場合（U＝C　C＞E）には、発話時におけるその事象の継続は許容されない（Smith（1991）、Klein（1994）他）。このことを反映して、下記（1）～（3）の例文の提示に続けて、「まだ継続している」、「もう継続していない」ということを表す文を提示した場合に、両方を

許容するのが非有界で、「まだ継続している」ということを許容せず、「もう継続していない」ということだけを許容するのが有界な場合である。以下で見る例文に後続する表記はこのテストを行った結果、非有界・有界どちらの捉え方がなされたかを表すものである。

（1）At that time, John was our team leader.
　　He still is. He is not any more.
（2）This morning, John was reading a book.
　　He still is. He is not any more.
（3）John read a book this morning.
　　*He still does. He does not now.

英語について検討を始める前に、過去時に生起した事象を非有界（C＝E）にとらえた時、そして有界（C＞E）に捉えた時に用いられる表現形式について、進行相を例に先ずは仏語次に日本語において使用される形式をごく簡単にみてみよう。文中のイタリックは有界性、非有界性の決め手となった時間表現である。各例文に後続する表示は、このテストを行った結果、例文が表している時間項関係（上段）と有界、非有界の別の判断である（下段）。

仏語

（日本語訳については下記の日本語の例文を参照）

単一事象における行為の進行中に認知　　U＞C ＆ C＝E

（4）*Aujourd'hui*, *à 9h*, Jean <u>jouait</u> au tennis.　現在も継続可 非有界

単一事象における行為の進行　終了以降に認知　　U＝C ＆ C＞E

（5）Jean <u>a joué</u> au tennis *jusqu'à 18 heures* aujourd'hui.
　　現在迄の継続不可 有界

（6）Jean <u>a joué</u> au tennis *pendant deux heures* aujourd'hui.
　　現在迄の継続不可 有界

同一事象の反復継続中に認知　　U＞C ＆ C＝E

（7）*À cette époque*, Jean jouait au tennis *le week-end*.　現在も継続可 非有界

（8）Jean jouait au tennis jusqu'à 18 heures *le week-end*. 現在も継続可 非有界

（9）Jean jouait au tennis pendant deux heures *les week-ends*.

現在も継続可 非有界

同一事象の反復継続　終了以降に認知　　U＝C　&　C＞E

（10）John a joué au tennis les week-ends *jusqu'à ce qu'il soit diplômé*.

現在迄の継続不可 有界

個々の例文からもみてとれるように、仏語では、非有界（(4), (7)～(9)）と有界（(5), (6), (10)）とは明確に異なる形式により表されている（前者は半過去、後者はここでは複合過去）。また、継続性のある事象を同一の表現形式(半過去)で表していても、共起する時間表現により継続の終了時間を設定すると、有界であることを示す形式に変化することが明確に示されている。ただし、反復する事象では、これらの期限設定は、単一事象の継続期間として適切であれば、反復の継続する期間ではなく、毎回繰り返される単一事象に設定される。この設定された期限つきの事象が反復することで事象群からなる連鎖となり、それにより非有界に捉えられることになる。[4]

仏語の場合瞬時に完了する事象を除く、すべての継続可能な単一の事象では、状態、行為の進行、そして複数の同一事象による反復・習慣が、非有界に捉えられる（U＞C C＝E）。これらの事象はすべて、1つの文法的カテゴリーである半過去により表現される。これは過去時制と非有界アスペクトが融合した形式で、過去時に生起した事象を非有界として捉えたことを表す形式である。そのため過去時に事象が終了したと理解された際の有界な捉え方（U＝C　C＞E）の場合には一切用いられず、複合過去もしくは単純過去が用いられる。

このように仏語では、単一の事象であれ複数の事象の連鎖であれ、終了した後で有界として捉えられた場合には、必ず異なる文法形式が用いられる。これに対し、英語では状態、行為の進行、行為の反復、習慣の継続はそれぞれ異なる形式で表される。しかし、有界と非有界では仏語のような文法形式

の対立はなく、同じ形式が用いられる。言語形式に基づくカテゴリー化は、仏語や日本語とは異なって見えるが、意味のカテゴリ―化についてはどのような傾向が現れるだろうか。何らかの共通性があるか注視していきたい。

次に日本語における非有界の表現方法について簡単にみておこう。同一の形式を非有界、有界のどちらにも用い、文脈や共起する時間、その他の表現により、最終的な捉え方になることが示される。

日本語

単一事象における行為の進行継続中に認知　　U＞C ＆ C＝E

（11）*今日9時に*ジョンはテニスを<u>していた</u>。　今現在も継続可 非有界

単一事象における行為の進行終了以降に認知　　U＝C ＆ C＞E

（12）ジョンは今日午後*6時迄*テニスを<u>していた</u>。現在迄の継続不可 有界

（13）ジョンは今日*2時間*テニスを<u>していた</u>。　現在迄の継続不可 有界

同一事象の反復継続中に認知　　U＞C ＆ C＝E

（14）*その当時*、ジョンは週末にテニスを<u>していた</u>。

現在も継続可 非有界

（15）ジョンは*週末に*午後 6 時までテニスを<u>していた</u>。

現在も継続可 非有界

（16）ジョンは*週末に* 2 時間テニスを<u>していた</u>。　現在も継続可 非有界

同一事象の反復継続終了以降に認知　　U＝C ＆ C＞E

（17）ジョンは*卒業するまで*週末にテニスを<u>していた</u>。

現在迄の継続不可 有界

進行相を表すテーイル形による例文を見るかぎりでは、動詞の形式は全く変わらないなか、時間表現によってのみ、有界（(12), (13), (17)）非有界(11),の意味の違いが表されている（(11）9時<u>に</u>、(12）午後6時<u>迄</u>　(13）<u>2時間</u>)。そうでありながら、二者の形式が明確に異なる仏語と全く同じ結果になっている点が注目に値する。日本語の場合には、状態を表す動詞は「ある」、「いる」、「要る」等ごく少数で、テーイルの過去形が多用される傾向が

ある。これは行為の進行の継続、終止だけでなく、単一事象の状態、進行の継続の他、事象の反復、習慣も表す(また、完了も表す)。（日本語のテーイル形未来時の議論については佐野（2019）参照）。ここには挙げていないが、テーイル形の他には単純過去形が時間表現との共起により反復・習慣を表すことがある。また、過去の習慣に限定した「～したものだ」によっても過去の習慣は表される。

仏語の非有界形式の1つである半過去が一括して表す、状態、進行、反復、習慣は、英語においてはそれぞれ異なる形式もしくは異なる時間表現との共起を必要とする。以下仏語、日本語における上記の結果も踏まえて、英語について上記と同じ方法で4つの異なる意味領野別に意味から形式への対応の検討を行う。

以下では、有界・非有界のテストの結果は、個々の例文ごとに示すことはせず4つの群ごとにその見出しの右側にまとめて表記してある。いずれの例文も群内での判断は一致している。仏語、日本語の結果から、非有界に捉えられた事象であっても、生起継続の期限を表す*jusqu'à 18 heures*、*午後6時迄*、もしくは継続期間/時間を現す表現が共起した場合には、有界として捉えられることから、英語の例文の一部においては、2種類の時間表現を個別の例文で示すのではなく、1つの例文内'until 6 o'clock'と'for 2 hours'等を併せて表示した。

状態の継続　単一事象　　非有界

(18) *At 9 o'clock yesterday*, the parcel was on the shelf.

(19) *Last Friday*, John was ill.

(20) *In those days*, the statue stood there.

(21) *At that time* we lived in Kyoto.

状態の終止　単一事象　　有界

(22) The parcel was on the shelf *until 6 o'clock/for 2 days*.

(23) John was ill *until last Friday/for 5 days*.

(24) The statue stood there *until it fell down/for fifty years*.

(25) We lived in Kyoto *until 2019/for 5 years*.

行為の進行継続　単一事象　　非有界

(26) *At 9 this morning*, John was playing tennis.

(27) *At 9 this morning*, he was teaching English.

行為の進行終止　単一事象　　有界

(28) Today, John was playing tennis *until 6 o'clock*.

(29) This morning, John was playing tennis *for 2 hours*.

(30) **At 9 yesterday, John was playing tennis *until 6 o'clock/for 2 hours*.

(31) Today, John was teaching English *until noon*.

(32) This morning, John was teaching English *for 2 hours*.

(33) **At 9 yesterday, John was teaching English *until noon/for 2 hours*.

事象の反復 (進行形) 継続　　非有界

(34) *In those days*, John was playing tennis.

(35) *In those days*, John was playing tennis until 6 pm/for 2 hours.

(36) John was playing tennis until 5 o'clock *on weekends*.

(37) *In those days*, John was teaching English.

(38) *In those days*, John was teaching English until 6 o'clock/for 2 hours.

(39) *In those days*, John was teaching English until noon on weekends.

事象の反復 (進行形) 終止　　有界

(40) John was playing tennis *until last year/for 3 years*.

(41) John was playing tennis *until his graduation/ his retirement*.

(42) John was playing tennis for 2 hours on weekends *until his retirement*.

(43) *In those days, John was playing tennis on weekends *until his retirement*.

(44) John was teaching English *until last year/for 3 years*.

(46) John was teaching English *until his graduation/ his retirement*.

(46) John was teaching English for 2 hours on weekends *until his retirement*.

事象の反復　習慣（単純過去形）継続　　非有界

(47) *In those days*, John played tennis.

(48) *In those days*, John played tennis until 6 o'clock/for 2 hours.

(49) *In those days*, John played tennis until noon on weekends.

(50) *In those days*, John taught English.

(51) *In those days*, John taught English until 6 o'clock/ for 2 hours.

(52) *In those days*, John played tennis until noon on weekends.

事象の反復　習慣（単純過去形）終止　　有界

(53) John played tennis *until last year/for 3 years*.

(54) John played tennis *until his graduation /his retirement*.

(55) **In those days*, John played tennis on weekends *until his retirement*.

(56) John taught English *until last year/for 3 years*.

(57) John taught English *until his graduation/his retirement*.

事象の反復・習慣（used to）継続　　非有界

(58) *In those days*, John used to play tennis.

(59) *In those days*, John used to play tennis until 6 o'clock/for 2 hours.

(60) *In those days*, John used to play tennis until noon on weekends.

(61) *In those days*, John used to teach English.

(62) *In those days*, John used to teach English until 6 o'clock/for 2 hours.

(63) *In those days*, John used to teach English until noon on weekends.

事象の反復・習慣（used to）終止　　有界

(64) John used to play tennis *until last year*.

(65) John used to play tennis *until his graduation/his retirement*.

(66) John used to play tennis on weekends *until his retirement*.

(67) **In those days*, John used to play tennis on weekends *until his retirement*.

(68) John used to teach English *until last year*.

(69) John used to teach English *until his graduation/retirement*.

(70) John used to teach English *for 2 years*.

以上、英語における状態、行為の進行、行為の反復、習慣に対する判断をみた。英語では、上記に見たようにそれぞれ異なる形式が対応する。しかし、それにも拘わらず、行為の進行だけでなく、同じ意味カテゴリーのなかでの各例文に対する非有界な捉え方と有界な捉え方の現れ方には、先に仏語と日本語に見た時と全く同一の結果が得られた。例文中の時間表現の内容（期間制限の有無）と位置以外は語彙を含め基本的に同一条件に統制していることから、有界と非有界の捉え方の相違は、ひとえに話者が選択した時間表現の表す内容と、その文中での位置に起因していることになる。英語においては、進行形が表す進行相が代表的なImp.とされる傾向がある。しかし、英語でも進行形だけではなく、下位の意味領域ごとにいくつかの相互に異なる形式を用いて、必要な時間表現と共起することで、仏語においては半過去が表す非有界という意味上のカテゴリーを弁別的に表現できることを示している。また半過去では表し得ない有界なとらえ方については、仏語のように対立する（文法）形式はないものの、共起する時間表現や文脈情報、または時間表現の位置により、的確に表現されていることが明らかとなった。

この結果は、次の第4節で検討しようとしている「未来時における非有界

な捉え方はありえるのか」という問題に対して、非常に有益かつ強力な検証手段を提供することになる。それは、もし、英語において、進行形を用いて表される事象だけが非有界として捉えることができ、進行形を用いていれば必ず非有界な事象としてしか捉えられないのであれば、未来時に生起する（であろう）事象についての表現が、進行形によりなされている場合にはそれは必然的に非有界となるはずである。その場合、第2節でみた、ここでの枠組みでは、未来のある時に生起すると想定される事象は、現実世界にはまだ存在しない未来時の事象である以上、その未来時において事象生起中に認知することはできないという主張であるために、正しい予測ができなかったことになる。

幸い、これまでの結果から、共起する時間表現の位置、表す内容、文脈、以外はほぼ同一の表現が、時間表現等の表す意味内容に応じて、非有界にも、有界にも捉え得ることが判明した。したがって、次の第4節では、ここでの手法を未来時に生起が予測される、あるいは予定される事象についての表現に適用し、話者が果たして未来時において認知するという非有界な捉え方をしているかについて検証を行う。

4．未来時に生起する事象の非有界性の検証

本稿における仮説では、時制が担う意味の基盤となる枠組みは、次の2種類の時間項関係の組み合わせに依拠している。それは事象の生起をどの時点で認知するか（C＝E, C＞E, C＜E）と、発話時とその認知の時との時間関係（U＝C, U＞C, U＜C）である。

このように、2つの時間項関係同士の組み合わせによりその結果得られる3項から成る時間項関係としてみた場合、発話時以降の未来時に生起する（であろう）事象については、次の2 つが可能な組み合わせとなる。それはU＝C＜E（未来時有界）と、U＜C＝E（未来時非有界）である。

この節では、未来時における非有界が時間項関係という点では可能であっても、実際の現実世界においては、未実現の未来の世界における認知は不可

能であるという限界により、この時間項関係がこのままで適用されることはないということを検証する。

先ずは未来時において、事象を非有界に捉えるということについて明確にしておかなくてはならない。話者は発話時において現実世界では未だ生起していない事象について、それ以降に生起（開始）する（であろう）と認知（思考活動として予測）していることになる。この時、最も重要なのは、未来時において「有界」としているのは、発話時からみて、現在生起していない事象が、未来時において生起を「開始する時点」に境界があるとしている点である（U＝C　C＜E）。このように捉えると、未来時に生起するであろう事象の終止点は特段問題にされないことになる。

過去時に於いては、有界の境界は事象の終了時にあり、終止点がある以上は当然開始点があることは含意される。未来時においては逆に、開始された以上、多くの行為は終了が予測されるということになるが、その終止点の有無は、ここで検討している日、英、仏語においては、アスペクトの対立には関与しない。

第2節で見たように、Comrie（1976）、Smith（1991）、Klein（1994）、Langacker（1991）はそれぞれ、事象を捉える見方が、事象の生起期間中の一部（Imp.）か、開始点から終点までのすべてを含む全体（Perf.）かによる対立としている。またKlein（1994）では視点や展望という比喩を退け、話題句と事象句の包摂関係としているが、事象の開始点と終止点を含むか否かという点では、基本的に他の三者とほぼ同一の主張と見做せるであろう。ここでの立場との相違については、以下で英語の未来時に於ける有界・非有界の対立についての結果を検証後にまた改めて検討したい。

ここでの枠組みにおいて、未来時に生起する事象を非有界に捉えることが可能かどうかを検証するためには、2つの段階が必要となる。第1段階においては、発話時に問題とする事象が生起していない。このことを現在時制の文により確認する。次いで未来時での事象生起を表す助動詞willと動詞句を述部とする、事象の新たな生起を表す文が容認されることをみる。これにより、話者が事象の開始点（による境界）が発話時以降にあると認知してお

り、ここでの枠組みのもとで有界として捉えられていることになる。

第2の段階では、発話時においてある事象が既に生起している場合に、それが引き続き未来時においても継続して生起している場合には、非有界として捉えられ（あるいは解釈され）そして、認知時も未来時にあるように感じられるのではないかという問題が生じてくる。これに適切に対処して初めて、現実世界では未来時において生起する事象をその生起中に認知することは不可能であり、したがって、ここでの枠組みでは、未来時において、事象は非有界に捉えられることはないという仮説が支持されることになる。以下この第1段階と第2段階を順次見ていくことにする。

未来時での事象生起への言及：発話時に事象が生起していない場合

以下例文（71）から（80）における各群の例文の構成を（71）をモデルとした（71)′により説明しよう。最初に、発話時現在において問題とする事象が生起していないことを、現在時制による文を用いて確認する。

(71)′ The parcel is not on the shelf now.

a. *It will still be on the shelf.

b. It will be on the shelf.

c. At 9 o'clock the parcel will be on the shelf.

次いでa)では、先行文「荷物は今棚にない」としているのに対し、「それはstill まだ棚にある」と述べることで、その荷物が発話時から継続して棚の上にあると主張したために、矛盾をきたして不適格となる。この事実と、a）の文から「still まだ」を削除したb)の文が不適格にならないということは、b)の文は、still を削除したことで、発話時から継続していないと解釈されたために許容されたことになる。（71b）は、状態を表しているが、発話時以降に生起を開始する（つまり有界であると）解釈されていることが判明したことになる。

以下a)では、「先行した文において生起していない」と言った事象が「未来時においても「まだ」継続している」と主張する文を提示する。また、b)では「ある事象が発話時以降、未来時になってから生起するだろう」と述べ

ている文を提示している。いずれも助動詞willと動詞句により、未来時において生起する事象に言及しているものなので、発話時現在には生起していないという状況を踏まえ、どのように解釈されるかを検討した。

以下（71）～（80）では、例文は、先の過去時における事象の検討から明らかになった、4つの意味領域を群として提示する。それらは、単一事象による①状態と②進行中の行為、および複数の事象の連鎖による同一の単一事象による③反復（継続期間制限あり；進行形）と④同一主体による習慣（継続期間制限なし；単純形またはused to）である。これらは過去時においては、いずれも共起する時間表現により非有界とも有界とも捉えられたことから、未来時においても同一の時間表現を用いてテストを行った。

以下は結果の要約である。

先に（71）′で見たように第1文は、発話時において事象が生じていないことを表す現在時制の文その後に続くa)の文は、助動詞willを伴う動詞句により、未来時に生起する事象を表し、さらにstillによりその事象が、発話時から継続して生起していることを表している。この時の容認性の判断は、（71）～（80）いずれについても明らかに不適格で、もともと事象が生起していないのに、継続は認められないというものであった。これに続くb）はstillを伴わないことで、発話時以降に新たに事象の生起が開始されると解釈された。これは、発話時において、未来時に生起する事象の開始時が認知されるため、有界に捉えられたことを示す。この結果は（71）～（80）のすべてについて一様に認められた。

状態　単一事象

(71) The parcel is not on the shelf now.

a. *It will still be on the shelf.

b. It will be on the shelf.

c. At 9 o'clock the parcel will be on the shelf.

(72) John is not ill now.

a. *He will still be ill tomorrow.

b. He（will）/could /may be ill in a few days.

(73) The statue does not yet stand in the park.

a. *The statue will still be there.

b. The statue will be standing here at the end of the year.

(74) John does not live in Kyoto now.

a. *He still lives in Kyoto.

b. He lives in Kyoto next month.

c. He will be living in Kyoto next month.

進行中の行為　単一事象（進行形）

(75) Now John is not playing tennis.

a. *He will still be playing at 5 in the evening.

b. He will be playing tennis this afternoon.

c. At 5 o'clock he will be playing.

(76) Now John is not teaching English in the class.

a. *He will still be teaching at 5 in the evening.

b. He will be teaching in the evening.

c. At 5 o'clock he will be teaching.

事象反復　（現在進行形）

(77) John is not playing tennis on weekends now.

a. *He will still be playing next month.

b. He will be playing tennis on weekends next month.

c. Next month, he will be playing tennis on weekends.

(78) John is not teaching any subject now.

a. *He will still be teaching next semester.

b. He will be teaching English next semester.

c. Next semester, he will be teaching English.

事象反復　習慣　（現在形）

(79) John does not play tennis on weekends now.

a. *He will still play tennis on weekends.

b. He will play tennis on weekends next month.

c. Next month, he will play tennis on weekends.

(80) John does not teach English now.

a. *He will still teach English next semester.

b. John will teach English next semester.

c. Next semester, he will teach English.

先にここでの（71）～（80）のb)の文は、すべて発話時以降に生起を開始するために、有界として捉えられることを見た。ここでの例文はいずれも継続性がある事象を表しており、過去時においては、継続の期間もしくは終止を示す時間表現がない場合には、先行する文脈や、前置された適切な時間表現が共起すると、非有界として解釈されていた。したがって、未来時においても、ある時点を表すような時間表現が前置された場合には、それにより認知時が未来時に置かれる可能性についても見ておこう。例文（71），（75）～（80）のc)文では、時間表現が前置されている。

（71），（75）（76）のc)では、特定の時刻が前置されており、この場合過去時であれば、事象生起中に認知するという非有界の解釈が得られるはずであるが、ここではそのような解釈は得られず、時刻の場合には事象の生起開始時を指定する。また、ある期間が前置された（77）～（80）c)の場合にも、前置された期間が事象の生起中の一部を表すというのではなく、その期間に事象が生起する予定を表している。いずれも有界として捉えていることを表している。先に第3節で過去時において非有界を表していた表現形式もuntilやfor 2 hoursのような事象の継続の終止点を表す表現と共起すると、有界な捉え方がされたことをみた。ここでの例を見る限り、未来時においては、過去時において非有界を表す手がかりとなった時間表現の前置によって、非有界の捉え方がなされることはない。これはここでの仮説に従えば、発話時に事

象が生起していないことにより、開始点は必ず発話時以降になる。このことから、有界であることが確定するので、共起する時間表現によって影響を受けることはない。逆に、過去時と同一の時間表現との組合わせであっても、最初にみたように、時間表現が表す意味の方が変化して、未来時では時間表現が表す意味が、事象生起途中のある区間ではなく、(予測、予定)開始時間となるのである。また、各例文が表す意味は、未来時に生起する（であろう）事象の予測であったり、その計画や予定である。そして重要な点は、これらの予測等は、発話者の発話時点でのものだということである。ここでの枠組みで表せば、事象について考えている認知の時以降に事象開始時点があり（C＜E)、その考えている時は発話時である（U＝C）ということになる。

以上にみた時間表現の解釈と文の表す意味についての結果からは、ここでの枠組みに従った場合に得られる、「未来時においては、発話時に生起していない事象は、必ずそれ以降に開始点があることになる。したがって、発話時において（U＝C）すべて有界であると捉えられる（C＜E）ことになる」という予測と一致する結果といえよう。

では、発話時において事象が既に生起中の場合には、その未来時についての言及は非有界として捉えることができるのだろうか。またもし捉えられるようなら、どのように捉えられるのかを検討しよう。

未来時における非有界の捉え方は、再三見ているように、事象の捉え方（C＊E）と発話時との関係づけ（U＊C）という2 つの時間項関係同士の組み合わせとしては可能である。しかし、実際の世界での状況の表現に用いられる直接法においては、認知時を発話時以降におくことはできない。それは、人間の認知能力は、未来に生起中の事象を、直接認知できないという生物学的限界があるためである。したがって、直接法では、現実の世界では、未来時においては非有界という捉え方はできないのではないかと予測される。そこで、この予測について検討を行う。

過去のある時において非有界に捉えた事象は、その後発話時まで継続していても、それ以前に終了していても、その非有界性には関与しなかった。それでは未来時の場合にはどうであろうか。未来時の場合には、もし仮に未来

のある時に生起中の事象を何らかの方法で実際に認知できると仮定しよう。その場合、その時現実世界で検証できる生起中の事象の継続は、その時点後の継続ではなくその時点以前の現実世界からの継続ということになる。すなわち、現実世界と未来時との接点にある発話時での生起と、その事象の未来時までの継続性ということになる。

未来時での事象生起への言及：発話時に当該事象が生起している場合

上記では、発話時に事象が生起していない場合を考えたが、ここでは、発話時に事象が生起している場合について、先と同様のテストを行う。今回は、過去時において非有界として捉えられた表現形式と、その時共起した表現を発話時における非有界の例文として、現在時制により提示する。この現在時制による例文に引き続き、その事象の未来時での継続を表す例文a)と、未来時において新たな事象が生起する例文b)とを提示している。新たな事象とする中には、単一の行為の継続が生物学的に不可能という理由で終止され、再度新たに開始される場合も含まれている。（againによる文（85）～（88）のb）。また、現在時制であれば、必ず発話時での状況を表すわけではなく、未来時において生起が確実に見込まれる予定の場合にも現在時制が用いられるので、そのような例文（（87）（88）の先行文）も併せて使用している。

これまでと同様、単一事象（（81）～（87））と同一事象の反復（（88）～（91））別に意味領域によりまとめて例文を提示した。結果の要約は以下の通りで均一なため、ここに記すだけで、見出しには記載しない。

① 先行文は現在時制により、発話時に事象が生起中であることを示しているため、非有界と解釈される。（（87）と（88）は例外的に現在時制であるが直近の未来の予定を表していると解釈されるので、発話時には生起しておらず、有界となる。）

② a) ～ c)の文は、助動詞will と動詞句により、未来時での事象の生起を表す。

③　a)の文は、‘still’により、発話時に生起している事象が、未来時においても継続して生起していることを表す。この文の有界性はこの節での主要な議論となるので、この段階では特定しないこととする。

④　b)とc)の文はいずれも発話時に生起している事象とは異なる事象が未来時に生起することを予測/予定していることを表す。したがって事象の開始時は発話時以降になるため、有界となる。

状態　単一事象

(81) The parcel is on the shelf now.

a.　It will still be there at 5 o’clock/tomorrow.

b.　It will be on John’s desk tomorrow.

(82) John is ill now.

a.　He will still be ill tomorrow.

b.　He will be well tomorrow.

(83) The statue stands there now.

a.　It will still stand there next year.

b.　It will be moved next year.

(84) John lives in Kyoto now.

a.　He will still live in Kyoto next month.

b.　He will live in Tokyo next year.

c.　He will be living in Tokyo next year.

進行中の行為　単一事象（進行形）

(85) Now at 1 o’clock, John is playing tennis.

a.　He will still be playing at 5 in the evening.

b.　He will be playing again on Friday.

c.　At 3 o’clock tomorrow, he will be playing.

(86) Now, at 1 o’clock he is teaching English in the class.

a.　He will still be teaching at 5 in the evening.

b. He will be teaching again next week.

c. At 3 o'clock tomorrow, he will be teaching.

未来時の予定　単一事象（進行形）

(87) At 1 o'clock today John is playing tennis.

a. He will still be playing at 5 o'clock.

b. He will be playing again on Friday.

(88) At 1 o'clock John is teaching English in the class.

a. He will still be teaching at 5 o'clock.

b. He will be teaching again next week.

同一事象の反復　（進行形）

(89) Recently, John is playing tennis.

a. He will still be playing next month.

b. He will be playing golf next month.

(90) John is teaching English.

a. He will still be teaching next semester.

b. He will be teaching French next year.

同一事象の反復　習慣

(91) John plays golf on weekends.

a. He will still do so next month.

b. Next year, he will play tennis instead of golf.

(92) John teaches English.

a. He will still do so next semester.

b. Next year, he will teach French instead.

以上の各群の結果のうち、継続する文脈でない、つまり発話時には生起していない事象について、未来時での生起に言及する場合には、先に見たのと

同様、発話時以降に事象が開始し有界と捉えられる。これに対し、発話時に事象が生起している場合には、事態は単純ではない。その理由として次の点が挙げられる。①同一の事象の継続がstillにより認められること。②その継続が認められた例文は、未来時での生起を表すwillを伴っていること。③発話時現在におけるように、未来時においても未来時の時点で事象の生起中に認知しているように感じられること。さらに、④この発話時以降の未来時に継続して生起している事象は、発話時から継続中ということで、事象開始時が介入することもなく、未来時において継続しているようにみえることである。

いずれも‘still’によって未来時においても継続しているとされる、これらの事象は、発話時以降に生起開始する事象とは捉え難いことを表している。これは発話時においても、未来時においても生起中に認知されて非有界としているように見える。もし、そうであるならば、ここで想定した未来時の枠組みは誤っていることになる。そこで、もう少し詳しく検討してみたい。

今度は発話時に生起している事象の場合、なぜそのまま未来時にも継続しているように感じるのだろうか。そして、それとは異なる事象の場合には、同じように状態、行為の進行、反復・習慣を表しているのに、なぜ未来時の事象生起中に捉えることができないののだろうか。同一の事象のときだけできるのはどのような理由によるのだろうか。これは佐野（2019）が直面した、日本語のテーイル形により表される単一事象の進行継続および反復・習慣が未来時に生じるときに直面したのと同じ問題である。それは、発話時に生起している事象が継続している場合にだけ、あたかも未来時に認知したように非有界に捉えられているように見えるのはなぜかという問題である。日本語だけでなく英語でも全く同じ問題が提示されたことになる。そこで、そのときの解決法も取り入れて検討してみよう。

今ここでの枠組みにおいて重要な、「現実世界において、話者は未来のある時に、生起中の事象を実際に認知することはできない」という点は堅持することとする。そのうえで、未来時における認知のように感じるメカニズムについて考えてみよう。

上記で見た現象は、2 つの文（節）が同じ事象について異なる時制で語ったために生まれた効果だと考えられる。

(93)　a. Now, John is teaching English.

　　b. He will still be teaching next month.

a）では発話時において、継続する事象の生起中に捉えて現状は行為の進行中であることを述べている。非有界に捉えていることから、事象は発話中には終止点を迎えず継続される。次の b）では、発話の時点での事象の生起については、すでに発話されているので、発話時を含まないそれ以降について生じる開始点を持つ有界な事態として捉え、発話時以降の事象の生起を予測している。この2つの文を続けて発することにより、a）の表す第1の文が表している事象が生起している間に、b）の表す2つ目の文が言及している事象が生起することとなり、その結果として継続して解釈されるのではないかと思われる。

事象が継続して未来時において認知されたような印象を受けるのはまた別の理由によるのかもしれない。過去時における非有界な捉え方の中心的基盤は、過去のある時の記憶が発話時に想起され、それに基づいて言語化が行われることである。これに対し未来時に生起する事象は、直接認知は不可能である。しかし、唯一、発話時において生起している事象が未来時にも継続すると想定した場合には、発話時以降に生起し続ける事象の直接の認知は叶わなくても、発話時現在の認知内容をそのまま投射することで、疑似的状況を作りだすことができるのではないかと考えられる。このような操作がもし可能ならば、過去時において記憶を想起したのと似た体験をすることができると思われる。このような操作は、発話が取りあげた特定の事象をその時のまま同一事象の投射によって行われるので、迅速に負担も殆どなく疑似状況を作成できる。しかし同一の事象でない場合には、状況も含め、新たな事象についての像を記憶や知識に基づいて作成しなければならないので、瞬時に処理を行うのはほぼ不可能であろう。

最後に過去時と発話時現在の間にはなくて、発話時現在と未来時の間には存在する別種の境界の可能性を挙げておこう。それは、発話時が属している

現実世界と、実現の可能性はあるがまだ実現されておらず、実現の保証はない未来の世界との境界である。これにより、現実世界では未来時における事象を直接認知できないことで非有界な捉え方ができないだけでなく、現在の状況の継続が見込める直近の未来は別として、未来時に属する事象はすべて現実世界からは事象が生起する以前の「外側」からしか捉えられないという可能性も考えられる。この先は、様相との関係の在り方の問題となるので、本稿での扱いはここまでとする。

以上、英語でも、日本語でも、未来時において生起する事象については、非有界な捉え方は、文法上は許容されても、現実世界での事象の生起を問題にする直接法の範囲内では、認知上の理由で不可能となり、予測どおり、非有界な捉え方は観察されなかったことになる。したがって、未来時においては、非有界に捉えられることはないと考えられる。これは先に見たように、Smith（1991）とKlein（1994）とも異なる見解となる。

ここまで、英語について、事象の捉え方（C＊E）と発話時との関係づけ（U＊C）という2 つの時間項関係同士を組み合わせることで、時制とアスペクトに対応する意味の基盤となる枠組みが得られると主張してきた。本稿ではその中でも特に未来時において非有界な捉え方は可能かということを中心に英語についてその妥当性を検討してきた。英語においては、現在時制、過去時制により表される文が表す事象は、事象の意味的カテゴリーにより、用いられる文法形式が異なる。それにも関わらず、共起する時間表現により非有界にも有界にも捉えられることが示された。いずれもここでの枠組みにより提供される時間項の関係により枠組み内に位置づけられることが認められたといえよう。今後は対応する表現形式について、より詳細な検討が求められることになる。

今後の課題

仏語では、未来時制により、ある時に進行継続する単一事象を表したい場合には、主動詞の未来形を用いるのではなく、進行形とされる、être en cours de ~, être en train de~（be in the process of~）、を用い、助動詞を未来形にする。

このことは、仏語の場合も未来時制では非有界の捉え方は含まれないために、別途進行形が用いられることがあることを示唆している。未来時で生起する事象を仏語ではどのように捉えるかについては、まだ検討中である。ここで日本語と英語について先にみた結果が、仏語においても認められるならば、仏語の未来時制では、過去時制において認められる有界Perf.と非有界Imp.の対立がないことの説明も、ここでの仮説により可能になるかもしれない。

また、英語、仏語における時制の一致が過去時に於いてだけ認められ、未来時には認められないということも、ここでの枠組みにより説明できる可能性がでてきた。（この枠組みでの英語の時制の一致については佐野（2014）参照）。

しかし、より大きな課題は、ロシア語をはじめとするスラブ語、および現代ギリシャ語で、未来時制において非有界Imp.・有界Perf.の語幹による対立が認められることである。ここまで、日本語と英語を検討する限り、未来時の事象を非有界に捉えることはできないとしてきた。そして、仏語（他のロマンス語においても）未来時制は有界・非有界の文法形式上の対立はない。しかし、ロシア語を含むスラブ語では、未来時の有界・非有界の対立がある。Comrie（1976）においては、過去時におけるImp. とPerf.の特徴づけは、スラブ語とロマンス語において基本的に共通する特徴に基づいている。アスペクトの相違を説明する枠組みは異なるものの、ここでの捉え方においても過去時については共通の特徴が認められる。そこで、全く異なるシステムであるとか、あるいは仮説が誤りであるという前に、スラブ語で未来時におけるアスペクトの対立、特にImp.が現れてきた歴史的経緯と、未来時にPerf.により捉えられる事象において、その終止点が果たす役割と、Imp.と捉えられる事象の特性（例えば、終止点が明確に設定できない習慣など）について詳細な検討を行うことで、ここでの枠組みによる説明の可能性も得られるかもしれない。

注

1　佐野（2017）および、本稿での表記の相違について：（2017）では、表のセル内に、日英仏語の表現形式を記載した。表も含め、PerfectiveとImperfectiveの日本語訳として、完結相、未完結相という名称を未来時に言及の場合も含めて用いたが、本稿では、その名称は使用せず、英語のままで使用した。認知時より以前に事象時がある場合のみ、Perfective としたが、認知時以降に事象時がある場合には、ここの表にもみる通り、Perfectiveという表記は用いていない。
表：表内の発話時（U）、認知時（C）、事象時（E）は、本稿以前には小文字表記となっていたものを、今回変更した。
ここで、行為として、activityのみを対象とした。非有界においては、動詞句全体として継続性を持ち得る事象が対象となる。瞬間動詞が単一事象を表わす場合、状態の変化の有無に関わらず対象外となる。したがって、achievementは除外され、Smith（1991）の挙げたSemelfactiveも対象外とした。Accomplishmentについては、目標への到達時点が瞬間動詞の要素があり議論の余地があるため、本稿では取り上げなかった。有界に捉える場合にはいかなる制限もない。

2　想起という認知活動は発話時にある。この時の過去時における認知とは、典型的には、話者による自らの経験の認知であり、発話時に於いて記憶としてアクセスされ、発話時現在の状況についての理解との統合により、言語的に表現されているといえる。

3　非有界と判定するための副詞類、名詞句等時間表現については、2 つの点について、より詳しい分析が必要になる。1 つは前置という位置でなければならないのかという問題である。より一般的に焦点となる位置なので、そのために、認知時を際立たせる効果があるというだけかもしれない。しかし文脈からの情報を受ける位置はやはり文頭の位置において受け取っていると思われる。また、もう 1つは、ここでの枠組みで時間表現の働きを検討する中で、Klein（1994）が主張している話題時（TT）となる時間表現と事象時（ET）の時間の包摂関係も、有界・非有界な捉え方と相関関係が認められることである。どのように相互に関係しているのかについても、検討が必要である。

4　仏語の場合、反復のインターバルはかなり長くても、潜在的にはまた繰り返す可能性があるとみなしているようで、その場合中断と見なして半過去で表現される傾向がある。習慣停止には~時までという表現ではなく、人生節目となるような出来事で、卒業、就職、引退等の表現により終止とみなすという例も認められたため、英語の例にも採用した。

参考文献

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: an introduction to the study of verbal aspect and related problems*. Cambridge: Cambridge University Press.

Klein, Wolfgang. 1994. *Time in language*. London: Routledge.
Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar., vol 2: Descriptive Application*. Stanford University Press.
Reichenbach, Hans. 1947. *Elements of symbolic logic*. New York: Macmillan.
Smith, Carlota S. 1991. *The parameter of aspect*. Dordrecht: Kluwer Academi.
Vendler, Zeno. 1957. Verbs and Times. *The Philosophical Review*, Vol. 66, 143-160.
佐野けい子. 2014. 英語の過去時制解釈における相の役割. 慶應義塾大学言語文化研究所紀要第45号. 239-257.
佐野けい子. 2017. 時間項関係と時制表現:もう1つの対応：日・英・仏語に見る共通性. 慶應義塾大学言語文化研究所紀要第48号. 79-111.
佐野けい子. 2019. 未来時と未完結（imperfective）アスペクト：認知時を第3項とした日本語の分析より. 慶應義塾大学言語文化研究所紀要第50号. 303-324.